

行政視察報告書

報告者
田村 勇一

1. 沖縄那覇市役所

「市街地活性化(トランジットモール)について」

トランジットモールとは

自家用自動車の通行を制限し、バス、路面電車、LRT、タクシーなどの公共交通機関だけが優先的に通行できる形態の歩行者優先の歩道。一般車両の通行を禁止し、バスや路面電車などの公共交通機関と歩行者の通行だけが許す市街地。都市中心部の人々が集う憩い空間。魅力的で安全な歩行空間を言う。

〔所感〕

沖縄観光の顔として、すっかり定着した国際通り。その国際通りが、なんと歩行者優先道路になった。

2002年2月11日より、毎週日曜日、お昼の12時から夕方6時まで、トランジットモールに姿を変え、時間内は、一般車両は通行禁止になり、歩行者優先。通りには、ホップカブやストリートパフォーマンスのためのブースが設けられ、ぎやがれ横断される。

また、通りに面した各ショップでは、期間限定のワグジセルも実施。この時期、沖縄観光の目玉となり多くの人が訪れ、賑わいを増しており、効果的な策と言える。

〔連携事業〕

- ① グレードアップ事業
- ② インターネット情報発信事業
- ③ 夏まつりの那覇「一万人のハイハイ踊り隊」
- ④ クリーンアップ作戦
- ⑤ 産林処理事業
- ⑥ 清掃事業
- ⑦ 販路促進事業
- ⑧ 国際通りトランジットマイル事業
- ⑨ 国際通り推奨店制度導入事業
- ⑩ 2千円札普及促進キャンペーン
- ⑪ 不法利用物の取締りパトロールの実施
- ⑫ 国際通り固定ベンチ設置事業
- ⑬ 見守り(防犯)カメラ設置事業
- ⑭ 離島マルシェと屋台村のコミュニティ施設を建設
- ⑮ 外国人観光客向け免税システムと受付けサービスのリストバンド導入事業
- ⑯ 国際通り多言語MAP作成事業

2. 多摩市役所

「道の駅新田やんばる物産センターの運営について」

〔所感〕

全国的にも高い利益を上げている道の駅である。販売品種も豊富で顧客のニーズも捕えている。

美し遊チットや各施設チットも販売を促進し以外なのが宜しく販売の入気を博しており全体的に買っ求められている。

またイベントでは丹精をこめて「父の日・母の日 感謝祭」と時期に合った催しで好評を得ている。

また、施設内の設備や運営方法で、外国語表記(英語)も看板表示等も目立し誰れにも見やすく分かりやすく工夫が凝らされている。

今後の課題としては、常に新規開発を目標としあらゆる事に挑戦することである。従業員も社長を始めとして親切でまじめな人が多い道の駅であった。

3. 沖繩市役所

「沖繩こども園について」

動物園を中心とした3つの施設があり、県内でも有数のテーマパークである。

以前は、県内唯一の遊園地を併設されていたが、経営悪化のため、

1999年8月に閉館、その後動物園なども改装したため一時閉館

2004年4月に財団法人沖繩子ども未来ゾーン運営財団が、沖繩子ども未来ゾーンとしてリニューアルしたものである。

〔所感〕

立地条件が非常に良好で、土地の高低をうまく利用し、動物園に対しても入場者に対しても魅力ある動物園である。

一方こども園としても、学習に役立つお宝とされており、保育園見存などの幼児教育に適しており、動物や植物に対する配慮がされている。

また、花との関わりも重要視されており、季節毎に色々なイベントが企画されている。それはほとんどが従業員の手で行われ、ワークが専任がこもっており、訪れる人の共感を博している。

入場者も年々増加しておりその成果でいる。

沖縄子どもの国について

H30.1.31 10:00~11:30

坂井心次

本土復帰にあたり、地元の子どもの為、に誘致された 沖縄子どもの国 (1970年開園) は、国民の浄財でできた。

オープン当時は、公園だったが、初代の園長さんが、動物を入れていたと聞く。

1972年(即、47年)本格的にスタートをして35万人の入園者で賑わいを見せた。平成2年、遊園地オープンで40万人を超えた。

しかしながらバブルがはじけ、徐々に入園者は減少した。

その後、平成16年にリニューアルオープンをし、37万人に復活。園長を全国公募し、西川園長の手腕のおかげにより。

平成28年には、45万6千人、去年はプラス3万人と入園者を増員させた。

危機感を持ち、サービスを向上させていくという取り組みは、素晴らしいと感じた。

本市においても、子どもたちの力を信じ、見守り、育成、企画やプログラムを常に考え進化が、必須であると思った。

公益財団法人 沖縄子どもの国

営業時間 9:30~17:30

火曜日 休園

大人500円 中~高校生200円 4才~小学生100円

中心市街地活性化(トランジットモール)について

H30.1.29 15:30~17:00

坂本心次

那覇国際通りのホコ天「トランジットモール」 12:00~18:00

毎週日曜日、那覇国際通りの区間約1300メートル、道路幅約18メートルを全線モール化し、一部の許可車を除く乗用車の通行を禁止し、歩行者優先の通りとしている。

通り内ではオープンカフェやストリートパフォーマンス、イベントなどを実施

取り組みの経緯について

国際通りは、「沖縄の顔」として重要な役割を果たしていた。

しかしながら、車社会の進展、住宅の郊外化、流通の変化による郊外型大型店の進出などによる国際通り離れが進み求心力が低下している。また、軌道系交通機関のない沖縄では、公共交通はバスやタクシーのみで、自動車依存が高く国際通りは慢性的な渋滞問題があった。この現状を改善するため、本格的なトランジットモール実施に至っている。

現在運営主体(実施場所の商店街組織の当該連合会)に対し年間200万円を助成している。事業総額は年間300万程度であるが、大半は通行規制誘導員に対する人件費である。

トランジットモール内で実施されているイベントのマンネリ化や夏場の暑さ対策、車道での収益事業の確立、実施主体の自走化、商店街や周辺店舗の経済効果等が課題として挙げられる。

本市においては、2月3日、民間活力導入図書館もオープンし益々の発展を期待する。市民には色々な意見があることから今後も課題や提言はしっかり分析し、駅周辺が、継続的に魅力ある歩行空間や商環境へと整備して頂きたい。

道の駅許田やんぼろ物産センターの運営について

(社名やんぼろ物産株式会社(第三セクター法人) H30.1.30 13:30~15:00
資本金 6000万円 設立1992年7月29日

坂本心次

沖縄県第1号店の「道の駅」本島北部に位置し「やんぼろ」の新鮮野菜・特産品が盛りだくさん。

やんぼろ物産センターは、「やんぼろの特産品を通じてお客様と生産者を「しあわせ」な気持ちにするために「お客様」と「生産者」と結ぶ「架け橋」となり、やんぼろの地域振興に努められている。

1. 「道の駅」許田やんぼろ物産センターで特に集客に寄与しているのは、どの部分をと分析されているか。

美ら海チケットや各施設チケットを全て置いてある、又、宝くじ販売をしている、宝くじだけを買いに年6回来る人もある。

2. どのようなイベントを行っているか、又、特に好評だったイベントは、

もずく流し、母の日父の日、感謝祭である、又、月に1回は黒糖などの特売

3. 施設内の設備や運営方法で、運営していく上で改善されたことは、

外国語表記(商品)各チケット販売場のリニューアル、表着板の修繕。

4. 利用者の反応は、

良好

5. 今後の課題、展望は、

常=新規開発を目指す、(PR商品や新メニュー等)

県内には8ヶ所道の駅があるが、やんぼろ物産センターにあっては、立地条件も良く、坪内売り上げは約2000万(利益5000万)の好成績。

とにかく、インバウンド(東アジア、中国、台湾、韓国)がすごい。

本市のソレネ周南も、これからの運営収益を期待する。

平成30年1月29日

—— 国際通りトラジットモールについて ——

(那覇市)

記・米沢痴達

<所感>

沖縄県全体では年間920万人もの観光客があり、中でも那覇市の国際通りは、観光客を対象とした土産店、飲食店、百貨店、ホテルが集中し、多くの人通りで賑わっている。公設市場等もあり、地元消費者も多く利用している。

(か)、近年の車社会の進展に伴い郊外に住宅地が立地し、又、郊外型大型店が進出など、街のスプロール現象が中心市街地の求心力を失わせている。あわせて、沖縄県には軌道系の交通機関がなく、県内移動は自動車依存となっており、国際通りは慢性的な交通渋滞が課題となっていた。

こうした現状打開の一つの手段として、平成19年よりトラジットモールを実施し、公共交通であるバス、タクシーを利用した歩車共存通りによる来街者の利便性の向上や市街地の活性化に取り組んでいる。

毎週日曜日12時から18時の間、一般車両を通行止めにし、通りはオープンカフェやストリートパフォーマンスのブースが設けられ、イベントが開催されている。通行量は、平日より多く、ここ数年2万人をキープしている。事業費は年間600万円、そのうち200万円を市が補助、主に誘導員の人件費に充てている。

課題としては、イベントのマンネリ化、夏場の暑さ対策、車道での収益事業の確立があげられている。商店街からは、費用対効果がみられないとの声もあるとのことである。どの商店街振興にもいえることであるが、那覇市においても施設整備等補助金頼みの姿勢に苦慮しているとのことであった。

周南市は2月3日新徳山駅ビルがオープンし、連日たくさんの人で活況を呈しているが、中心市街地へどう人を誘導するかが課題であり、旧態依然の現状の商店街では回遊させるインセンティブは働かない。軌道系交通もあり、路線バスも徳山駅を中心に整備されており、駅前商店街への交通アクセスは整っている。

依然として駐車場不足を口にする店主があるが、消費者は本当に欲しいものがあれば、公共交通を利用してでも、高い駐車料金を払ってでも来る。新徳山駅ビルオープンにあわせ、市街地循環バスも運行されている。

要は、行きたくない魅力ある商店街、消費者ニーズにあった商店街づくりが求められる。駅前商店街は駅ビルのオシャレ感や元気のシャワーを浴びるお膳立ては十分整った。

「自ら呼び込み自ら稼ぐ」は、売人の基本中の基本。しっかり稼ぎ充分の税金を納めていただき、周南市の経済波及効果の実を上げていただきたい。

平成30年1月30日

—— 道の駅許田やんばる物産センターの運営について ——
(名護市)

米沢 知達

<所感>

道の駅「許田」は、平成6年に沖縄県初の道の駅として開業し、名護湾に面した風光明媚な好立地にある。すぐ近くに年間入館者300万人の「美ら海水族館」があり、そのうち200万人が立ち寄り、まさに水族館のマグネット効果に浴している。

北部やんばる地域の特産品が所狭しと並べてあるが、一目で分かるように工夫されている。6次産業化にも取り組まれ、土産品の「チョコもち」は、この道の駅で製造される限定品でヒット商品になっている。館内にはレストランの他、テイクアウトコーナーでは、サーターアンタギーや天ぷらなど、人気のテナトが出店している。

又、集客のツールとして、美ら海水族館や他観光施設の割引引きチケットを販売し、3.5%~5%の手数料も収入源として大きいとのこと。

許田道の駅は、3セクターで運営され、市が3割の株を所有し、副市長が取締役に就任している。従業員47名中31名が正社員、10のテナトが出店し、本年度総売上げ8億2000万円、営業利益は5,000万円となっている。

コンパクトな道の駅であるが、全国道の駅ランキングで1位にもなっている。併設されている「道路情報ターミナル」は、置敷きの仮眠室があり、観光ガイドが地図を使い、県内人気スポットやドライブコースを紹介している。又、要望があればオリジナルな観光プランも作成してくれる等、観光果の意気込みを感じた。

駅長はじめ、スタッフの笑顔での接客が印象的であった。

駐車場が狭隘であったが、市長選応援でかけた管官房長官の鶴の一声で、駐車場整備が約束されたとのこと、沖縄のおかれている複雑さを垣間見た。

ソレーネ周南は平成26年に開業し、駅長辞任、単年度赤字計上など紆余曲折があったが、ようやく軌道に乗りつつある。しかし、今尚駅長不在の状況にあり、組織としてのガバナンスに不安を感じる。

立ち上げ時から飲食部門(レストラン)の不振が続いているが、改善が求められる。

特色ある福祉型の道の駅を進化させ、地域住民の生活を支える柱として一層の役割を期待する。

平成30年1月31日

沖繩子どもの国について
(沖繩市)

米沢 痴達

<所感>

沖繩子どもの国は、県内唯一の動物園としてタヌキ3匹でもって開設されたが、本土復帰後、国の基地に係わる特別事業の支援を受け、子ども達を社会全体で育てる役割を担う施設として発展してきた。

バブル期終了から入場者が漸減し、園の危機もあったが、同特別事業の支援を受け、公益財団法人として平成16年「沖繩子ども未来ゾーン」としてリニューアルオープンした。旧来の動物園機能はそのまま残し、子供博物館「ワンダーミュージアム」と市民参画の拠点としての「チルドレンセンター」を併設し、広域的施設として県内有数のテーマパークとなっている。施設運営の財源は県が支援している。

来園者は全体で年間63万人となっており、インバウンドの影響で外国人14%、基地関係者が5%を占めている。

動物園では、ゾウ、キリン、カバなど150種の人気動物を飼育し、ゾウ乗りやエサやり等ふれあい体験ができるコーナーもあり、大人も十分楽しめる施設となっている。又、古琉球の時代から300年続いていた、琉球競馬も年数回開催されている。

ワンダーミュージアムは動物園とは違ったコンセプトで、科学、芸術、哲学をテーマとした「理解と創造は驚きに始まる」というコンセプトで、遊んで学べる体験型のミュージアムである。ハンズオン展示と考えることを大切に育むワークショップを体験することができ、年間来園者63万人中17万人が入館している。

沖繩子どもの国は、園全体に植栽がなされており、特に季節の花が多くあしらわれ、花に囲まれた動物展示は、大いに心を和ませるものであった。

徳山動物園は、青少年教育の受皿として、自然学習館「ねいちゃん」や野鳥観察所等で、ふれあい、エサやり体験等を実施し、動物の生態や命の教育に資している。

長期リニューアル中であるが、別の切り口で子供達の未来を育てる体験施設も計画に折り込んでいかねばならないだろう。

財政面の問題もあるが、更に付加価値を付し、周南市のランドマークとして進化することを期待する。

行政視察報告

兼重 元

視察期日 平成 30 年 1 月 29 日
視察市 那覇市
視察事項 1.国際通りトランジットモールについて 2.20 年先を見た総合交通戦略

視察目的

1.トランジットモールについて

トランジットモールとは一定の日時を決め那覇市国際通りの交通規制による歩行者空間を確保して開放すること。これにより地元商業活性化を図ろうとするもの。

那覇市国際通りは沖縄県随一の商業集積地である。行政機関や金融機関、民間企業などが近隣に立地している。通りには観光客を対象としたテナポが多く、「沖縄の顔」として重要な役割を果たしている。しかし近年の車社会の進展、住宅の郊外化、流通の変化による大型店の進出などで県民の求心力が低下している。軌道系の交通機関を持たず公共交通はバス、タクシーのみであり、自動車依存が大きく、慢性的な交通渋滞問題を抱えている。こうした現状の改善策として地元事業者や国、県、市、警察、バス協会等が集まり、協議を進める。平成13年度から社会実験を経て平成19年4月1日から運営主体を地元商店街組織に移行、今日に至っている。

概要と実施方法

- <実施区間> 国際通り 1.6 km区間の内 1.3 kmを設定
- <実施期間> 毎週日曜日の 12:00~18:00
- <実施内容>
- ・誘導員を配置して、一般車両の通行規制、歩行者に開放する。
 - ・数か所のパフォーマンスエリアを設け、イベントを開催する。
 - ・オープンカフェや宣伝事業など直接の物販以外の取り組みを行う。
 - ・個店による子どもたちの遊び空間の創出など、独自の取り組みを行う。
 - ・区間内移動手段として、トランジットバス、ペロタクシーが走行。
- <事業実績>
- ・通行量は平成 24~28 年度平均 20,000 人/日
 - ・開催回数は 37~40 回/年

事業効果

通行量は導入前（平成 18 年度）迄は平日の通行量が休日より多かったが、導入後（平成 19 年度）は平日を上回る。要因はトランジットモールの効果ではないかと考えるが十分な検証は出来ていない。

トランジットモール開催時は 2 万人程度を確保しているが、一部店舗から売り上げ増にはなっていないとの意見あり、現在あり方について市が中心になって検討している。

市民や観光客は 6 割程度が事業の必要を望んでいる。然しイベントのマンネリ化や交通の利便性を良くしてほしいとの要望もある。

運営主体の地元商店街連合会は 4 つの組織と 474 店舗あり、意見も多く取りまとめに苦慮している。また、トランジットモールを実施しても売り上げ増につながらないとの声がある。

今後の展開

トランジットモールを導入するまでは関係者で構成する委員会を組織し、魅力ある歩行者空間や、商い環境について議論を重ねた。地元商店街連合会が運営する本格実施後は課題が多く、その課題も放置、併せて商店街自体の求心力低下が起きている。

そのため市が委託事業として平成 29 年度から「国際通りトランジットモールビジョンづくり支援事業」を実施することにした。

この事業はなお課題も多く関係者が多く色々な意見もあり、今後の方向性（ビジョン）を共同で策定関係機関と連携して取り組んでいきたい。としている。

所感

全国的な傾向であるが、従来の商店街が生き残るための取り組みは出尽くしたのではなかろうか。那覇市国際通りは年間の通行量も店舗数も周南市とは桁はずれに多いが、やはり沈滞化している。当然のこととして地方都市は同じ状況にある。

現在社会が車中心の日常活動であり、伴って大型店舗の郊外進出が拍車をかけている。

周南市の中心市街地にどうすれば集客が図れるか、那覇市国際通りの実態を知ること、周南市が置かれている中心市街地の活性化も妙案があるのか、厳しい現実が一層閉塞感を醸している。

商業は立地産業の典型であり、自助努力なしでは再生は困難であろう。いつの時代も同業者の結束が問われながらも、ねたみや嫉みが渦巻く現実を垣間見ることになった。また何かと港に依存する体質が却って発展を阻害することにも気づくことだろう。

丁度この時、徳山駅前図書館の開館がなった。呼応して地元商業者がどう意欲を持ち、取り組んでゆくのか、大きな試金石となろう。

2. 20 年先を見た総合交通戦略について

目的

人中心に誰もが移動しやすいまちづくり、車社会に対応した公共交通の利用促進を目指して取り組む

現状

名覇市の交通事情は 30 年目との比較で路線バスは 1/4 占有率は 3.4%、自家用自動車は

67.4%を占める。自家用車の一人乗率は90%になっている。

所感

那覇市の交通事情は周南市における現実の比ではない。特に軌道系（電車、鉄道）交通機関のない沖縄県全体に言えることだろう。更には県庁や市役所が市街地中心部に位置しており人の集中に拍車要因になっていると思われる。翻って国際通り商店街にとっては来街者の確保には有効に働いていると思える。当然、歩行者が安心して買い物ができる環境作りが急務になっている。また、自動車が移動手段の中心になっている中で、近年の観光客（900万人/年）の増加と相俟って大きなジレンマを抱えている。自動車と人の増加による渋滞に拍車がかかっている。また、転入者へマイカー自粛を呼びかけている。

更には、物流にも大きくロスが出ている。県全体で経済的なロスを生みだす結果になっている。軌道系としてモノレールが整備されているが、全長12km余りで利便性が高い施設とは思えない。多額の投資をしながらなぜと疑問が起こる。実感として不要な施設に思える。また、市が進める20年先を見据えた総合交通戦略のキーポイントは人が歩き易い道路と言うことであるが、市街地の形成からしても相当な財源と住民の協力が不可欠であり、長い時間が必要と思われる。特段の具体策は聞けなかった。南北の幹線は高速道路や既設の国道、県道が整備されているため通過交通を市街地に流入させない手段が講じられる必要がある。そのためには国際通りを通行する車の必然を調査し、現段階では方法として市内に流入する自動車に対する規制が必要であろう。

特段参考にすべき内容に欠けていたが、説明をいただいた市職員の肩にはお礼を言います。

行政視察報告

兼重 元

視察期日 平成 30 年 1 月 30 日
視察市 名護市
視察事項 「道の駅許田」

視察目的

全国の「道の駅」は平成 29 年 11 月 17 日現在で 1,134 駅を数える。

今回は沖縄県名護市の「道の駅許田」を視察する。

周南市も道の駅「ソレーネ周南」を持ち、指定管理者による運営をしている。集客数、売上増、利益の確保は経営上必須の要素である。沖縄県内で極めて優良な経営を続けている「道の駅許田」を視察し、その経営の実態を学ぶことで、今後に寄与したい。

概要

此处は沖縄県に 8 か所ある道の駅である。1994 年（平成 6 年）4 月 26 日県内で最初に設置される。運営は名護市（50%）・名護農協（当時）・名護漁協および一般が出資し設立した第三セクターの「やんばる物産株式会社」が運営する「やんばる物産センター」が営業を行っている。28 年度実績は年間集客 200 万人、売り上げ約 9 億円、利益は 500 万円である。

「道の駅許田」は国道 58 号線沿いにあり、国道 58 号線は那覇から沖縄北部本部町にある「ちゅうらうみ水族館」につづく幹線道路である。「ちゅうらうみ水族館」を目指す観光客約 200 万人超は往復この国道 58 号線を通過する。

地の利（アクセス）は抜群であり、この観光客を誘因する仕掛けを講じている。なかでも宝くじ売り場窓口は、これまで高額当選券がたびたび出たことからわざわざ那覇を含め県内から買い求めにやってくる。これが集客数増加の好循環にもなっている。現在駐車場の不足が課題であり、近い将来拡張したいとの意欲がある。

視察で問うた項目

1.集客に寄与していると思われること

ちゅうらうみ水族館のチケット販売（現地では 1,800 円が 1,650 円）、宝くじ販売

2.イベントはどんなものがあるか

モズク流し、感謝祭（正月トン汁無料サービス、農産品フェア（1 回/月）等

3.運営で改善点は

外国語表記（商品の各施設販売ブースのリニューアル、パンフレット、食品の食し方）

4.課題

常に新商品を開発する、地域（許田区）との関わりを密にする

所感

ハッとするような取り組みもなかったが、定番商品に頼ることなく土産、農産品、等に工夫や、開発を積極的に行っている。また、10店舗余のテナントが加わって競合していることが、相乗効果につながっていると思われる。

立地の優位性（チュラ海水族館が強力なマグネット効果を発揮）が殊更効果を上げているが、国内、外国人観光客に向けた商品をアピールしてうまく販売につなげている。

行政視察報告

兼重 元

視察期日 平成 30 年 1 月 31 日
視察市 沖縄市
視察事項 沖縄こどもの国「ZOOA&MUSEUM」

概要

沖縄市は極東最大の在日米国空軍基地「嘉手納飛行場」を抱えている。これまで沖縄は長年米国の統治下におかれ住民は生活やあらゆる活動に大きな制約を受けながらも日本政府の支援のもと、郷土復興に英知と努力を重ねてきた。

沖縄が自立に向け継続的に発展してゆくためには次代を担う子どもたちの育成、教育環境を構築することが重要である。これは社会全体が責任を持って子どもたちを育てていかなければならない。

旧「沖縄こどもの国」が昭和 45 年 5 月 5 日国の特殊法人南方同胞援護会により建設され「こどもの夢を育み、健康を増進し、上層と知識を豊にする」施設として多くの県民に親しまれ、その役割を担ってきた。

そのような中で国において沖縄県内で米軍基地が所在する市町村を対象に、若い世代の夢の実現、ひとづくり、更には雇用機会を創出し経済自立、活性化を図ってゆくために「沖縄米軍基地所在市町村活性化特別事業」が打ち出される。

沖縄市ではこの事業により「沖縄こどもの国」の更なる充実、発展を目指して新財団を発足させ平成 16 年 4 月 15 日、「沖縄こども未来ゾーン」としてリニューアルオープンした「人をつくり・環境作り・沖縄の未来をつくる」を基本理念として、旧来の動物園としての機能を残し、沖縄県初のこども博物館“ワンダーミュージアム”と市民参画の拠点である“チルドレンズセンター”を整備した。平成 24 年度からは公益財団法人認定を受け、運営法人の名称を「公益財団法人沖縄こどもの国」に変更し現在に至っている。

視察目的

「次代を担う子どもたちの育成、教育環境を構築することが重要である。これは社会全体が責任を持って子どもたちを育てていかなければならない。」これは誰も否定はしない次世代にたいする政治の命題である。

この「沖縄こどもの国」はネイチャーランド事業、ワンダーランド事業、チルドレンセンター事業と大きく 3 事業を行っている。これらは次世代を担う子どもたちにとってまことに適切な事業であり、その内容を視察することで新たな知識と情報を得るためである。

事業ごとの内容

1.ネイチャーランド事業

これは動物園であるが、平成 28 年度事業報告から抜粋する

(1) 飼育展示事業は園域面積 7ha、28 年度末の飼育数は 148 種類 1,88 点である。とりわけ入園者と動物のふれあいを多く取り入れている。*徳山動物園 5ha 117 種類 468 点 (H27.7 月)

1) えさあげ、ふれあい体験、2) 乗馬体験 3) 飼育等体験 4) ふれあい移動動物園・・・これはヤギ、ヒツジ、モルモット、蛇、馬たちとふれ合い体験ができる「ふれあい広場」の出張を市内外で展開する。5) 動物たちの誕生会 (全 9 回、約 380 名参加) 6) 展示企画事業 (全 7 回)

7) 教育普及事業・・・これは一般来場者に対するワンポイントガイドや団体向けのガイドのほか、学校教育と連携しながら教育普及事業を実施している。

内容・・・①飼育係による団体向けガイド・研修・総合学習 (調べ学習)、学校教育との連携では飼育係が小中学校 (5 団体) 趣き、近年ニーズが高まっているキャリア教育等の講座を開催している。②実習・インターンシップ・職場体験 (51 団体、224 名) 動物園を活用した職場体験の機会を提供している。

8) ワンポイントガイド事業・・・園内で飼育している動物にスポットを当て飼育係が毎回違うテーマでガイドを行う。9) 骨格標本及び動物の貸し出し・・・学校教育に寄与する

10) 琉球競馬「シマハラシー」事業・・・馬の調教事業、乗り手の調教事業、普及事業、開催事業、繁殖共同研究事業、研修会等への参加。11) 傷病鳥獣ボランティア事業・・・平成 19 年度より、沖縄県の傷病鳥獣保護飼養ボランティア登録を行い、沖縄県の傷病鳥獣救護事業に参加している。

(2) 植栽事業

1) 園内植栽環境美化作業、2) 園内樹木の管理作業、3) 花まつり展示と常設花壇の維持管理 4) 花まつり企画運営・・・県が主催する「沖縄花のカーニバル」の一連事業として開催している (2/25～3/26 4 万人)

(3) 環境美化事業、

(4) 誘客活動促進事業・・・主要イベントとして入りづける「沖縄こどもの国フェスティバル」「夏休み期間イベント (サタ ZOO ナイト、エイサー夏祭り)」「クリスマスファンタジー」「花まつり」を中心に公益的かつ青少年の健全育成に寄与する様々なイベントを実施している。

(5) その他多彩なイベントが子供むけに実施されている。

所感

今回は時間切れでネイチャー事業のみの視察になった。

「次代を担う子どもたちの育成、教育環境を構築する」と言う基本理念に立って事業を行っている。「沖縄子どもの国」の事業内容を記述したが、どの事業にも理念の裏打ちがあると思った。あえて言えば沖縄県が置かれている特異な歴史環境下にあって、大人の責任と

して如何に精力的に次代を担う青少年に対してその任を果たしているか、あらためて熱心さとその意欲に感銘を受けた。

本市も動物園を持っており、現在平成 39 年度（総事業費約 50 億円）を目途にリニューアル事業を進めている。

動物園が飼育展示事業に留まるのではなく、リニューアル事業とともにこの「沖縄子どもの国」が取り組んでいる事業の内容とその意欲を多く取り入れる事業があると感じた。

さらに「ワンダーランド事業」「チルドレンセンター事業」を視察すべきであった。

那覇市国際通りトランジットモール事業

平成 30 年 1 月 29 日

福田 吏江子

【概要及び所感】

〈トランジットモールの概要について〉

○実施区間

国際通り（県道牧志 39 号）約 1.6km のうち、約 1.3km の区間

○実施期間

毎週日曜日の 12:00～18:00

（ただし、雨の日や年末年始・他のイベント開催で特別に交通規制がかかる場合等、実施しない日が定められている）

○実施内容

- ・誘導員を配置して一般車両の通行を規制し、歩行者に開放する。
- ・数か所のパフォーマンスエリアを設け、イベント（エイサーや大道芸など）を開催する。
- ・オープンカフェや宣伝事業など直接の物販以外の取り組みを行う。
- ・個店による子供たちの遊び空間の創出など、独自の取り組みを行う。
- ・区間内移動手段として、トランジットバス（通常運行しているひとつの路線バス）・ベロタクシー（自転車タクシー）が走行。

○実施後の効果、市民や観光客の満足度

国際通りを含めた中心市街地の通行量調査では、導入前（H18）では平日の通行量が休日よりも多かったが、導入後（H19）は休日の通行量が平日を上回った。また、全体的な通行量が平日休日ともに過去 3 か年において増加傾向となっている。トランジットモール時の通行量は 2 万人程度と一定の水準を保っている。

平成 28 年の来街者アンケート調査では、6 割の方がトランジットモール必要としており、多くの方が現状維持を望んでいるとのことであった。しかし、イベントのマンネリ化や交通の利便性をもっとよくしてほしい等の意見もあり、より良い環境を望んでいることを確認している

のことであった。

また、一部の店舗からは売り上げに繋がらないとの意見もあり、トランジットモールの在り方について市が中心になって検討が行われている。

〈課題と今後の展開について〉

トランジットモール内で実施されているイベントのマンネリ化や夏場の暑さ対策、車道での収益事業の確立、実施主体（運営主体：那覇市国際通り振興組合連合会）の自走化、商店街や周辺店舗の経済効果が課題として挙げられた。特に、運営主体である那覇市国際通り振興組合連合会は4つの商店街組合の連合組織であり、意見の取りまとめに苦慮していることや連合会の資金繰りが厳しく運営費用の工面が大きな負担となっているとのことであった。

今後の展開として、トランジットモール導入までは関係者で構成された委員会の場で魅力ある歩行空間や商環境について議論を重ねていたが、導入後は、課題が生じても解決に向けての議論の場がなく課題がそのままになっている現状であることから、市の委託事業「国際通りトランジットモールビジョンづくり支援事業」を平成29年度に実施された。この事業で、商店街の中のいろいろな意見を受け、課題や提言を分析し、今後の方向性を協働で策定し、関係機関と連携して課題に対する取り組みを検討したいとのことであった。

また、担当課の話では、新たな取り組みとして、台湾の夜市のような夕方からのオープンカフェをしたいという案があった。沖縄の人は夜に活動する傾向にあり、夏場の暑い時期に実施できたらと検討されているとのことであった。

〈所感〉

那覇市の国際通りでは、多くの商店やお土産屋さんなど主に観光客を対象とした店舗が車道を挟んだ両側の道沿いに並んでおり、また、百貨店や飲食店など地元の住民が日常利用するような店舗も見られた。車道沿いにもかかわらず、入り口のドアや通りに面した壁がなく、オープンなつくりになっている店舗が多いことが気になった。観光客が多く、初めてのお客さんもお店の中に気軽に入れる雰囲気づくりができているように思った。お店への出入りがまるで、ショッピングモールの中のような気軽さであっ

た。買い物客が個人商店に入るにあたって、入ったら何か買わないといけないのではないかと、何が売ってあるのかよくわからないから入りづらいということも考えられ、敷居が高いというイメージがあるように思っていたことから、オープンな店構えになっているのは良いと思った。

毎週日曜日に実施することは、運営としてとても大変なように思った。また回数が頻繁になるにつれて、マンネリ化する傾向になることも理解できる。周南市においても「徳山あちこちマルシェ」が何回か実施されており、商店街の活性化につながっていると感じている。これまでもパンや雑貨、本、お酒と様々な手法で開催された。マルシェや商店街でのイベント等にこれまでよりも多くの方が参加し、特に子育て世代の方々がお子さんと一緒に中心市街地に足を運んで来ているように思う。那覇市の国際通りトランジットモール事業でも子育て世代や地元の方々をメインターゲットに位置付けて開催しているとのことであった。この度の事業は、親子連れや地元の方々にとって、来て楽しい魅力ある中心市街地へ寄与できるような取り組みとして、大変参考になった。

「道の駅」許田 やんばんる物産センターの取り組みについて

平成 30 年 1 月 30 日

福田 吏江子

【概要及び所感】

〈「道の駅」 許田 やんばんる物産センターの概要〉

○設立の経緯

昭和 62 年に沖縄県北部を訪れる行楽客を北部の玄関口である名護市へいかに足止めできるかという観点からやんばんる物産センターの構想がつくられた。休憩所の設置や北部地域の特産品を販売する計画が進められる中、車社会における県民ドライバーに対してのサービスエリアの設置が北部のイメージアップと地域経済の活性化につながるとして、ロードパーク設置を図り、運営母体として第 3 セクター方式によって、平成 4 年にやんばんる物産株式会社が設立された。その後、平成 5 年 12 月に建設工事が完了、平成 6 年 1 月にやんばんる物産センターがグランドオープンした。平成 6 年 4 月沖縄県初の「道の駅」認定がなされ、平成 7 年 7 月に「道の駅」許田道路情報ターミナルがオープン、また平成 9 年に宝くじ売り場がオープンした。

○社名

やんばんる物産株式会社（第 3 セクター法人）

○設立日

1992 年 7 月 29 日

○資本金

6,000 万円

○総売上高

平成 28 年度 約 8 億 2,000 万円

平成 29 年度 9 億円を超える見込み

○決算状況

約 5,000 万円の営業利益あり

○従業員数

47 名（パート含む）

○テナント数

11 店舗

○事業内容

- ・特産品、民芸品、工芸品、日用雑貨の販売
- ・酒類、清涼飲料水、嗜好飲料の製造販売
- ・卸売、小売販売
- ・農産物、加工及び販売
- ・土産品店、レストランの経営
- ・チケット等の委託販売及び宝くじ、郵便切手、収入印紙の販売
- ・県内外への物産展出店
- ・通信販売業務
- ・上記に付帯する一切の事業

〈質問事項に対する回答〉

Q1：「道の駅」許田 やんぼる物産センターで特に集客に寄与しているのはどの部分であると分析されているか。

A1：立地場所として、美ら海水族館への通り道になっていることから、美ら海水族館などの各施設の割引チケットを販売していることや宝くじ販売が集客に結び付いている。特に宝くじは年6回の発売であるが、高額当選者がよくでることにより有名となり、県中南部からも宝くじを買うためだけに来る人もいる。また、北部への通り道として、行きに訪問先への土産を買うために道の駅に寄り、帰りにお土産を買うために再度寄るという傾向にある。

Q2：どのようなイベントを行っているか。特に好評だったイベントは。

A2：毎年4月第3日曜日にある「もずくの日」の生もずく流しのイベントが人気である。また、母の日や父の日にイベントを開催したり、5月の大型連休には感謝祭が開かれ、豚汁無料配布や農業高校などの出品が行われる。月一回のペースで何かのイベントが開催されている。

Q3：施設内の設備や運営方法で、運営をしていく上で改善されたことは。

A3：表の看板がとても古くなっており、修繕しリニューアルしたい。また、商品の外国語表記が必要であると考えている。インバウンドの観光客の比率としては、全体の4割～3割くらいであり、一時はレストランがインバウンド客でいっぱいになったこともある。最近は少し落ち着いてきているが、商品をタブレット端末を通すと外国語表記できるように整備し

たいと考えている。オープンしてから約 25 年経っているのに、レストランも含め定番商品ばかりでなく、常に新商品を提供できるようにしたい。

Q4：今後の課題、展望は。

A4：PR商品や新メニューなど常に新規開発を目指したい。ここでしかないブランド商品を道の駅セットとして 10 商品くらい販売したい。また、目の前の道路変更や信号除去なども検討されており、新たに 100 台分の駐車場を増設する案も出ている。許田の立地条件の良さをいかし、接客を大切にして、親しみやすさや感じの良さを大切にしたい。

〈所感〉

やんばる物産センターの集客数や売り上げの高さは、その立地の良さが大きな要因であると思った。沖縄本島は外からの玄関口が那覇空港であり、道の駅許田やんばる物産センターはそこから美ら海水族館へ行くルート上にある。沖縄県の平成 29 年の観光客数は、900 万人を超えており、そのうち 488 万人が北部へ訪れ、そのうち 362 万人が美ら海水族館へ来館しているとのことであった。またそのうちの 200 万人がやんばる物産センターに立ち寄っていることから、やんばる物産センターは立地をいかした取り組みが上手になされているように感じた。

また、地域とのかかわりを大事にしており、産業まつりや運動会、行事等で出店しているとのことであった。イベント等においても自主防災や福祉など第 3 セクターだからこそいろいろと協力していると説明された。

規模が決して大きい道の駅ではないが、立地の良さをいかし、また地域との交流を図りながら運営をされており、何より道の駅の収益は、規模の大小が大きく影響するのではないことを理解することができた。本市の道の駅ソレーネ周南においてもその存在意義をもっと高められたら良いと思った。

沖縄こどもの国 ズーリアム OKINAWA ZOO&MUSEUM

平成 30 年 1 月 31 日

福田 吏江子

【概要及び所感】

〈沖縄こどもの国ズーリアムの概要〉

○設立の経緯

沖縄が本土復帰するにあたり何か地元の子供たちにプレゼントができないかという発想のもと本土復帰記念事業の一環として、昭和 47 年に財団法人が設立され開園した。オープン当初は、動物はたぬき 3 頭のみで公園のような施設であったが、徐々に動物を増やしていった。沖縄県内で初めて設置された動物園である。平成 2 年に併設して県内唯一の遊園地がオープン。入場者数が激増したが、バブル崩壊も伴って平成 11 年に経営悪化のため遊園地が閉館した。平成 16 年のリニューアルオープンにあたり園長を公募した。前年よりも 1 人でも良いから来場者を増やそうという民間的な姿勢でサービスの向上や充実を図る取り組みが進められた。また科学について知ってもらおうと主旨のもとワンダーミュージアムが設立された。また、沖縄こどもの国を支援するボランティアの活動拠点としてチルドレンズセンターが設置されている。1 階にはレストランや読み聞かせ事業等が実施される「えほんの国」がある。2 階は IT 工房となっている。沖縄こどもの国は、平成 24 年に公益財団法人化され、より教育施設の、生涯学習施設的になるよう取り組みを進められている。

○施設概要

全体は大きな公園のようになっている。その中に動物園エリアがあり哺乳類、鳥類、魚類、爬虫類、琉球弧に生息するめずらしい動物たちを含め約 200 種類の動物がいる。動物エサあげ体験やふれあい広場、在来家畜コーナーや乗馬体験コーナーなどがある。施設内には大きな湖があり、水とみどりの広場として野外ステージも設置されている。水鳥を眺めながら水上園路を散歩でき、バードウォッチングデッキではボートに乗ったり、釣りを楽しむことができるようになっている。ふるさと園では、沖縄の気候風土に適するように造られた明治末期から大正にかけての農家を復元さ

れている。先人たちの文化遺産を再現するとともに文化事業に施設を利用してもらうことで、地域の風俗、習慣、歴史を学ぶ機会となることを目的につくられた。家屋などは国の登録有形文化財に登録されている。乗り物コーナーでは、機関車やメリーゴーランド、3D 立体映像などが楽しめる。チルドレンズセンターは、入場ゲートを通さず無料で利用できるスペースであり、沖縄こどもの国を応援するボランティアの募集であったり、みらいスクールや沖縄魅力発見講座など各種講座が開催されている。ワンダーミュージアムは、平成 16 年に設置され、平成 26 年にリニューアルオープンされた。実際に触れて体験することができるハンズオン展示やワークショップ、体験プログラムを通じて子供たち自身が自ら不思議や驚きを体験できるしくみになっている。1 階は「身近なものごとの中にあるふしぎを見つけよう！」というテーマの『きづきの森』、地下 1 階には「ボールのいろいろなうごきを試してみよう！」の『ボールサーカス』、地下 2 階には「からだをつかって映像を動かしたり、想像力をはたらかせて、色や形を自由に描こう！地球のふしぎを感じ未来を考えよう！」の『そうぞう工房』が常設展示として設置されていた。また特別展示スペースもあった。

○入場者数を増やすための工夫

2004 年のリニューアルにあたり園長を公募し、その後、園長のリーダーシップのもと民間的な姿勢で取り組むことができていることが入場者数が増えている要因であると考えられる。またアジア圏の観光客が近年増えていることも要因の一つであるとのことであった。これまでは、沖縄県内の地元の子供たちのための施設として存在しており外向けに PR 活動をしてこなかったが、近年は 14%がインバウンド客となっていることもあり、沖縄市からも国内向け海外向けの PR をしてほしいと要望があったとのことであった。入場者の傾向として、約 80%が地元・沖縄県内からの来場、14%が海外から、5%が基地内から、1~2%が国内からの来場である。イベントの充実として、5 月大型連休の中のこどもの日のイベント、夏休み毎週土曜日のサタデーズナイト、クリスマスの夜間開園クリスマスファンタジー、2~3 月に開催される花まつりの 4 大集客シーズンに力を入れている。体験プログラムは月ごとに内容を変えている。営業活動として様々なところに出向いたり、団体や自治会、企業などへ DM を送ったり、学校へお知らせなどをチラシで配布することや、那覇空港に大きな看板を設置し、また旅行業者と提携してクーポン付にしている（ただし動物園は単価が低いいためあまりメリットがないとのことであった）などの取り組みが行われ

ていた。動物園の入場者は平成 28 年度でおよそ 45 万人で、そのうちの 4 割の 17 万 8,000 人がワンダーミュージアムに入場している。平成 29 年度の入場者数の実績見込みは 48 万人である。ワンダーミュージアムは、動物園の入場料とは別途に入館料を必要としている。これは、絶対に入館料は取るべきだという園長の強い意志のもと市との交渉を経て実現していることである。入館料を初めから無料にしておく後に課金すくことができなくなるからである。ただし、沖縄市の子供たちにはパスチケットが教育委員会から配布されており、市内の小学生は動物園もワンダーミュージアムも無料で入場することができるようになっている。遊園地は、これまで本土の民間企業が運営していたが、バブル崩壊の影響もありリニューアルのときに撤退され、一部メリーゴーランドやミニ機関車をそのままのこして運行している。乗り物の収益はとても大きいとのことであった。現在の沖縄市長は「こどもの国を日本一ユニークに」という公約を掲げており、今よりも 2 倍の敷地面積になるよう隣の市と交渉中であるとのことであった。

〈所感〉

一番印象に残ったことは、2 月~3 月にこども園内で開催される「花まつり」である。一か月間こどもの国の園内に多くの花が展示される。毎週土曜日日曜日に先着 100 名に季節の花の種がプレゼントされたり、「ももいろびより」という子供たちの健やかな成長を喜び健康を願うことをコンセプトとしたひな祭りイベントの開催、はなさくマルシェ、植物のある暮らし講座のワークショップ、何より「花まつり」最終日には会場内の一部エリアに展示された花のポット苗を 1 セット 500 円で袋につめて持ち帰ることができる「花のつめほうだい」が行われる。毎年大変な人気で、多くの方が来場されるとのことであった。周南市で開催されていた花☆ワイン周南まんま市場でも花苗の配布は大変な人気であった。沖縄こどもの国で開催される「花まつり」は来場するために、こどもの国への入場料を必要とすることから、収益にもつなげる良い手法であるように思った。

また、ワンダーミュージアムは展示がとても充実しており、大変よい施設であるように思った。子供たちが勢いよく遊んであり、見たり聞いたり触れたり試してみたり、動いてみたり、考えるなど様々な活動が行われていた。子供たちにとって、体験的に学ぶというのはとてもよいことであると実感できた。ボールサーカスが時に人気であるように思った。また映像の中に自らが入る仕組みになっている展示も人気であった。全体的にとて

も良かったが、説明が足りないところが気になった。なぜこのようになるのかなどもう少しくつろぎながら考えられるスペースなどがあっても良いように思った。現象についての説明文などがあまりない設置されていないのも目的があつてのことかもしれないが、体験したことがただ「楽しかった」で終わらないような促しができたらもっと良いと考える。